
君がいるだけで

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいるだけで

【Zコード】

Z6487T

【作者名】

じはんライス

【あらすじ】

うーん。もう少し続けようかなあと思ったけど、ひとまず投稿しておきます。続行を考えたら、少しづつ書き足していくます。

(前書き)

関係ないけど、台風はいやだなあ。

「「ケケララ」」
にわとりが無遠慮にわめく朝。実にすがすがしい。「わこまびい
い天氣だ。

「つるせえ！」

漫画家、ポンチョ勝沼は、窓を開け、にわとりに向け、ペンを投
げた。

「「ケケララ」」

にわとりの尻に刺さつ、にわとりは失神した。

「こつちは徹夜明けでくたくたなんじやい。たあ寝るが」
ポンチョは床に布団を敷いた。

「では先生。急いで印刷所に持つてきます」

「あいよ。」「くわうわん。早く行け」

「先生。それでは僕、一旦家に帰ります」

「「くわうわん。早く帰れ」

担当の焼島くんとアシのペペロンチーノくんが部屋を出て、ポン
チョは、カーテンを閉め、えいやつと布団にもぐる。布団にもぐつ
たら三秒で夢の中に入つた。お。オレ、マシンガン持つてゐる。今日
は殺し屋の夢かな。わくわくするぜ。お。あいつか。敵は。

「じゃんじゃんじやがいもさつまこもおー！」

けたたましく、ケータイが鳴る。

「うるせえなあ、もう！」

ポンチョは、夢の中でマシンガンを放り投げる。不機嫌になるポン
チョ。

「もしもし。誰じやい」

「あつポンちゃん？ あたし。華子よ」

「ああ。華子か。何の用だよ」

「ひつじーこ。今日はデートでしょ

「忘れてた！」

ポンチョはうぜえなあと思いつつ、華子は怒ると怖いので、尻に
ペンを刺した。

「痛えええええ」

目が覚めた。

デートの途中眠るといけないので、元気になる注射を腕に打った
(注・違法ですので、よい子のみなさんは真似しないようにしてく
ださい。するなら刑務所に入るのを覚悟してやろう。何事もリスク
というのはつきものだ)

ポンチョは、華子はファッショնにうるさいから、服選びに時間
がかかる。この前、ウケを狙つて、バカボンのパパと同じスタイル
で行つたら、怒つてセックスをさせてくれなかつた。

「うーん。まあこんなもんかあ」

鏡の前でポーズをとる。ジャニーズの私服みたいな感じになつて
る。実に愉快さに欠けるが、セックスをするためには仕方がない。
ポンチョは、ひげを剃り、軽く朝ごはんを食べてからアパートを
出た。

いい天氣である。徹夜明けのドラキュラ野郎には堪えるが、まあ
元気になる注射を打つたから大丈夫だろつ。

ポンチョは口笛を吹きながら歩く。華子とは、駅前広場で待ち合
わせだ。遅刻をすると、セックスさせてくれないので、寄り道しな
いで、まっすぐに行かねばならない。

「ちつこんな時に」

ポンチョが前を見ると、ちびっこ売春婦が立つていて。キャミソ
ールを着て、ツインテールでなかなかかわいい子だ。小学六年生く
らいだろうか。なぜ、売春婦とわかるかといえば、ポンチョの方を
じろじろ見てているからだ。

最近、不況の影響で、児童もこいつして金を稼がないといけない。
難儀な時代である。

「おじさん。2000円でどうですか」

「安っ。こや、やついう問題ではない。オレは犯罪はせん」「ばれなきや大丈夫よう。エッチしようよ」

「やついう問題じやない！」

ちびっこになんか手を出したら、マジで華子に殺される。ポンチョは、ちびっこ売春婦を無視してすたすたと歩いた。ちびっこ売春婦が追いかけてくる。

「おじやん。待つてよ」

「くわ。しつこいな」

「のまま駅前広場までついてくるんじやねえだらなと黙つて、ポンチョは焦つた。

「生きたい！」

オレは捕まるわけにはいかない。児童とセックスなどすれば死刑になる。オレはまだ死ぬわけにはいかない。オレは漫画家として漫画をたくさんたくさん描いて読者を喜ばせないといけないのだ。死んでる場合じやない。

ポンチョは必死に歩いた。

「おじやーん。えーん」

後ろを振り返ると、ちびっこ売春婦が、アスファルトに座つて、ひざをさすつている。ひざから血が出てた。こけたのかな。

「えーん。えーん」

「ああ。もう。世話の焼ける子だな」

ポンチョはあわててちびっこ売春婦のとこまで走つていった。ちびっこ売春婦のひざにつばをかけ、自分のシャツを破り、それでひざを巻いた。

「ひつくひつく。おじさん。ありがと」

「つたぐ。気をつけなよ。かわいい顔が涙で台無しだぜ？」

「えつ。あたし、かわいい？」

ちびっこ売春婦が目を潤ませている。

「勘違いするなよ。エッチはしないよ。早く家に帰りな

「あたし、家ないの」

ちびっこ売春婦に話を聞くと、彼女の両親は交通事故で他界してしまったらしい。親戚は引き取るのをいやがった。ちびっこ売春婦の父親がやくざだったので、嫌っていたのだ。

かといって、児童養護施設は、不況の影響で子供を捨てる親が多く満員状態。

そんなわけで、今、公園にテントを張つて生活しているところのだ。

「そうか……それで身体を売つて生計を立てていたのか

「あたし、もう売春なんてやりたくないな」

ポンチヨはかわいそうになってきた。

「よし。一緒に遊園地に行こう。気晴らしだ

「えついいの」

ポンチヨは一瞬華子に怒られるかなと思つたが、事情を話せばわかつてくれるだろう。華子は頭の悪い女じやない。

「やつたね。るんるーんるーん

「こ、こらっ腕に抱きつくな。おっぱい当たつてる」

「だつて、口リ華、うれしいんだもーん」

駅前広場が見えてきた。

「あつ華子だ」

華子が手を振つて、その手が止まり、険しい顔つきになつてゐるが、遠くからでもわかる。

三人で、噴水の前に座る。

「どうこつことなの、ポンチちゃん」

「いやだからや。事情を話すよ」

「おいしいな」

口リ華は、さつき、コンビニで買つてあげたソフトクリームをおいしそうに食べてる。

「こ、く、う、家のない子だからって、何もテーートにつけさせなくても」

「いやそつはこつてもさ」

口リ華が、一人のただならぬ雰囲気を察知し、おろおろする。

「『めんなさい。あたし、凶々しい。ちびっこ売春婦が遊園地なんて行っちゃダメよね。分をわきまえてない』

「あのつ口リ華ちゃん。そういう意味じやないのよ。あのね。その

「う

今度は華子があわてる。華子は、女性関係には厳しいが優しい女の子なのだ。

一人の様子を眺めながら、面白になあとポンチョは思つ。

「くつくくくくく

「何がおかしいの！？」

ポンチョは両脇から一人にお尻をつねられた。

「痛え！」

飛び上がるポンチョ。

噴水の水の中に落つこちてしまつた。

「あーポンちゃん」

「おじさん！ 大変」

二人はあわててポンチョを水の中から引っ張り出した。ポンチョを寝かせる。お腹がぱんぱんだ。相当飲んだ。

「マウス・トウ・マウスしかないわね」

「えつ華子さん。やるんですけど。みんな見てますよ
「やるしかないわ。やらないと死んじやう
「わかりました！」

口リ華はあわててポンチョの唇に自分の唇を重ねた。

「こ、これ。口リ華ちゃん。そういうことじやないのよ。あのね。あたしが。彼女のあたしが

華子が口リ華に空手チョップをしてひるんだすきに、自分の唇をポンチョの唇の重ねた。

「華子さんだけに任せておけない！」

今度は口リ華が華子に空手チョップした。

いつしか一人は火花を散らせてる。口リ華の後ろには巨大な竜が、華子の後ろには巨大な虎が構えてる。

なぜか、ポンチョの後ろには、桂三枝師匠が構えていた。意味がわからない。

結局、ポンチョは、一人が殴る蹴るなどして戦つてゐる間に、おっさん警官にマウス・トウ・マウスされてやつと気が戻つた。

「ふああ。さぶい。へーつくしょん」

「お嬢さんたち。日本刀や金属バットはしまつて、この男子を着替えさせてあげなさい」

「はーい」

華子とロリ華は警官に、服を借りて、パンツをコンビニで買ってきて、駅前広場の端にあるトイレにポンチョをつれていった。

「ポンちゃん。脱がせるよ」

「あい」

華子がびしょ濡れになつたポンチョの上着を脱がせた。

何ともメタボリックなボディ。ポンチョは漫画家だから運動不足なのだ。
それを見て、華子はうつとつてしまつ。ちなみに、華子はでぶ専である。

すると何と、ロリ華まで目がハートになつてゐる。

「すてき……」

「う、ロリ華ちゃん。あなたひょつとして、くまのパーさん好き?」

「大好き」

「やつぱり!」

またしても、華子の後ろに巨大な虎、ロリ華の後ろに巨大な竜が現れ、火花を散らせてゐる。

ポンチョと、ポンチョの後ろにいた三枝師匠はおろおろする。めんどくせえやつらだなと、とほほほほな気分。

しかも、たちの悪いことに、華子の後ろには阪神タイガーズの選手たちがバットを構え、ロリ華の後ろには中日ドラゴンズの選手たちがバットを構え、今にも戦争が起こりそつた。

ポンチョの後ろでは、吉本興業の若手芸人たちと三枝師匠がある

おろして。役に立たないな！！

「じゃんじゃんじゃがいもをつまいまおー！」

急にポンチョのケータイが鳴った。

「もしもし。誰だ。この忙しい時に」

「先生！ 直木賞の受賞が決定しました！」

「つるさい！ 今はそれどころじゃない！」

実は読者には内緒にしていたが、ポンチョは漫画以外に副業で小説も書いているのである。

ただ、こちらは、もともと、漫画原作を書く過程ではまつたものであり、完全に遊びで始めたのだが、いつの間にか、百万部作家となってしまい、漫画より収入が多くなってしまったのが困りものだ。相変わらず、華子軍とロリ華軍の間には火花がばちばち散つている。

おっとこじでCMです。

ついに出了ました。業界初、五分で生える毛生え薬「もじやくん」。定価は一万円と少し高めですが、その即効性から、大変お値打ちです。五分で夢のふさふさ人生。今すぐお申し込みを。

さて、華子とロリ華は……。

何とロリ華は顔だけロリ華で身体は竜になつて、口から火を噴いていた。

華子は顔だけ華子で身体は虎になり、ロリ華竜の身体に捕まっていた。

「あわわわわわ」

ポンチョは腰を抜かしがたがた震える。わずかに失禁していた。後ろを振り返ると、三枝師匠と若手芸人たちはすでに逃げていた。情けない！！

ポンチョは、警察に電話した。もうこうなつたら國家権力に委託して事態を收拾してもらつより道はない。

「へい。こちらポリスメン」

「あのその。えつとあの」

ポンチョはしどろもどろになりながら一生懸命状況を説明した。

「なるほど。二股ですか」

「いやその。違いますよ。そういうんじゃないです」

「二股は立派な犯罪です。複数股禁止法違反の重要犯罪です。悪い
んですけど、警察は犯罪者を助けることはできません」

「そんなあ」

警察の言つてゐることはむちゅくちゅである。単にこの警官はモテ
ない独身男だったので、ポンチョに嫉妬して、口から出任せを言つ
てるだけなのだ。

「おまわりさん」

「うるさい。今から、将棋を山さんと差すから、オレのことは忘れ
ろ。んじゃ」

ツーシーツー。

絶体絶命である。

いつの間にか、口り竜と華虎は巨大化に巨大化を重ねてトイレを
ぶち壊し、駅前の民家や店、ビルを踏み倒し、その下では、野球選
手たちが、バットで殴り合い、一般人も巻き込まれ、死体が転がっ
ていた。

空が暗くなつてきた。雨が降りそうだ。

ざああああああああああああ。

ポンチョは天に向かつてわめくが、天は何も答えてくれない。
ざああああああああああああ。

一体なぜこんなことになつた。

どこでどう間違えて、こんな異常事態になつてしまつた。

まるで、非正規雇用問題のよつである。

非正規労働者は1985年の段階では約600万人であったが、
現在は約1700万人にまで膨れ上がつていて、
実に全労働人口の三分の一である。

日本に未来はあるのだろうか！――

(後書き)

「華子＝大輔華子」、「口リ華＝河野夜兔」のイメージで書いています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6487t/>

君がいるだけで

2011年5月29日17時25分発行